

宮沢賢治は「猫」をどう描いたか

えが

賢治は猫がきらいだった

宮沢賢治の作品には動物がたくさん出てくる。宮沢賢治の鳥の研究をしていた時、童話と短編、劇作に登場する動物の種についても調べた。作品一二七編を調べた結果は、鳥類がいちばん多くて五五種、つぎが哺乳類で四一種（想像上の動物一二種）である。その後は、昆虫類が一七種、魚類が一五種、爬虫類が四種、両生類が四種、その他は一七種だ。よく出る哺乳類の一五種は、狐、猫、鼠、馬、山猫、兎、猿、狸、熊、獅子、象、鹿、牛豚、狼だった。それらの動物の多くは、人が住む地域の近くに棲んでいた。猫（飼育の猫）と山猫（架空の動物）は、作品によく登場する。主人公やわき役に多く猫を使った賢治は、猫に対してどんな気持ちを持っていたのだろうか。賢治の書いた短い文章に「猫」というのがある。賢治はその中で、

——私は猫は大嫌いです。猫のからだの中を考へると吐

国松 俊英

き出しさうになります。

と書いており、最後の文はつぎのように終わっている。

——どう考へても私は猫は厭ですよ。

賢治の家に飼った猫がいたかどうかはわからない。けれどここに紹介した文を読むと、猫は嫌いだったとわかる。

犬については、尋常小学校入学の日に学校へのとちゅう、大きな犬がいたのが怖かったという。六年の時の作文に、犬をけしかけられて恐ろしかったと書いている。賢治は飼った猫や飼った犬には、好感をもっていなかったようだ。

野山をいつも歩いていた賢治は、厳しい自然の中で懸命に生きる野鳥や動物たちに魅かれ、気に入っていたと思う。では、明治時代後半から大正時代にかけて、当時の人びとの飼った猫に対する考え、態度はどうだったのだろうか。

明治時代になってから、富国強兵を旨とし忠君愛国を是とする教育が重んじられた。その頃、頼山陽の「猫狗説」は少年たちに大きな影響をあたえた。忠義の心を持つ狗